



ワールドツアー

1月9日

Sudden Fiction Project

高階 經啓
hirotakashina

1月9日のおはなし「ワールドツアー」

「どうした」

バンドの連中ともめていたみたいだったので、ルネに聞いた。ルネは口を結んだまま尻のポケットからくしゃくしゃになったタバコを取り出し、取り出してからこの通路が禁煙なのを思い出したらしく、ため息をついてそのまま尻ポケットにしまった。

「昨日もここで演奏しただろう、って」

「なんだって？」

「自分たちは昨日もここで演奏しただろうって言うんだ」

「おいおい。ラリってるのか？ マズいな」

「ああ。わからん。クスリをやっているようには見えなかったんだが」

日本からやってきたそのバンドは、アジア風のフォークロックとでも言えばいいのだろうか、風変わりな演奏だった。最初はなんだか音がすかすかして幼稚な印象さえあったのだが、送られて来た資料のCDを何枚か聴いているうちに、だんだんこれも悪くないなと思えるようになっていた。

〈ワールドツアー〉と称してこの国にやってきて、各地のホールでそれなりの盛り上がりを見せているらしいと知って、おれは結構楽しみにもしていたのだ。だから2つ前の開催地で、メンバーの一人が急病になったと聞いた時は真剣に心配した。もしかしたらここまでたどり着けないんじゃないかと思ったからだ。でも日本からサポートメンバーを呼んで、ツアーは無事に続けられていて、今日、いよいよこの公民ホールに姿を現したのだ。

第一印象は、なんだか生氣のない奴らだな、というものだった。戦地にいた時の部隊の仲間の子つきを思い出して、いやな感じを受けた。ルネははっきり「なんだ。水揚げされた魚みたいだな」と言った。最近のルネは機会あるごとに毒をまき散らす。ルネの不機嫌には訳がある。付き合い合って3年になる彼女が他所から来た軟派野郎相手に浮気をしたとかしないとかで大喧嘩をして、家から追い出してしまったはいいけれど、1週間もたたないうちに追い出したルネの方が参り始めているのだ。だからいつも以上にいらいらして、口を開けば毒舌を吐くありさまなんだ。

おれたちが通路でしゃべっていると、不意に楽屋のドアが開いて、バンドのフロントマンらしき男がのっそりと出てきた。そしておれたちを見つけると近づいてきた。ルネが目をそらしたところを見ると、さっきの口論の相手がこの男なのだろう。男は激しく瞬きをしながらぼそぼそした声で言った。

「わかっているんだ。トイレはあっち、売店はこっち。客席に出るにはそこの角を曲がると早い」

「その通りです」おれは礼儀正しく返事した。「よくご存知で」

「住んでるようなもんだからな」フロントマンはあたりをじろじろ見て、廊下の壁をいきなりぱんんと叩いて笑った。「ハハハ。昨日も叩いた」

どう応じていいかわからないから、おれは黙っていた。昨日は彼は別な町でライブをやっていた。けれど逆らわない方がいい気がした。男はルネをひとにらみし、すぐおれに向き直るとこう言った。

「最初は信じたさ。この国の公民ホールは同じ設計図でつくられたから、みんなそっくりだつてさ」

「はい。その通りです」

「んなわきゃねーだろがよ！」フロントマンの声のピッチが高くなった。「確かに客は違う。毎日違うのが来ている。それは褒めてやろう。」

男は目をギラギラさせておれに噛み付きそうな勢いで言った。

「でも、もうわかっちゃった。おれたちはずーっと同じ場所に閉じ込められているんだってな」

「ミスター」

「いいんだ。あんたたちは雇われているだけだからな」フロントマンは寂しげに肩を落とすと楽

屋に戻って行った。部屋に入る直前に振り返るとこう言った。「よかったらステージを見てくれ」

そのあとの楽屋は気味が悪いくらい静まり返っていた。5人の男たちが、あのさして広くもない部屋で、会話もせずといったいどう過ごしているか、おれにはわからなかった。作戦の指令が来る前、待機しているテントの中で、移送中の荷台の上で、じっと黙って目の前の空間を睨みつけていた戦友のことを思い浮かべた。この上ない絆で結ばれていたはずの仲間たち。キッド、スチュ、テッド、ポマー。いまはもう連絡も取らない。二度と会いたくない男たち。青ざめた顔で目の前の宙を見据えるだけの暗い視線。楽屋の中もあんな風なのではないかと。いや、そんなことはない。日本人のこただ。おおかたPSPかDSでも遊んでいるのだろう。

開演時間が迫ると、他の会場と同様に、ここでもほぼ満席状態となり、彼らの人気の本物だということを裏付けた。オープニング曲はバンド名をそのままタイトルにした「ぼだいじゅ」という曲だった。

ぼくたち だいじに してほしい
ぼだいじゅ ぼだいじゅ
ぼうりょく だいじゃに たべさせろ
ぼだいじゅ ぼだいじゅ

真面目なのか不真面目なのかわからない、緩いテンポのだらだらとした妙な歌だった。

ぼんかれ だいじん たべちゃった
ぼだいじゅ ぼだいじゅ
ぼそぼそ だいじょぶ きこえてる
ぼだいじゅ ぼだいじゅ

香椎は日本語なので何を歌っているかはわからなかった。けれど気がつくとおれもルネもスタッフルームのモニターに釘付けになっていた。

ぼうそうして だいじゅうたいを ひきおこす
ぼだいじゅ ぼだいじゅ
ぼんくらだって だいじょうだんから ものもうす
ぼだいじゅ ぼだいじゅ

曲が終わるとルネは携帯電話を取り出し電話をかけた。出て行ったジュリにかけているのがわかった。モニターの中ではさっきのフロントマンが流暢なMCで笑いを取っていた。「ぼだいじゅっていうのは、その木の下でブッダが悟りを開いたって言われている木の名前なんだ。いい名前だろ？（歓声と拍手）でもよく考えたらおれたちはただの木なんだよな。ブッダじゃない。悟りを開いたのはブッダで、木はその横で立ってるだけだ。悟りは開けない（笑い）」それを聞きながらおれは同じ部隊にいた仲間の顔をくっきりと思い返していた。誰かが言った何かくだらない冗談でみんなで大笑いしたときのことを思い出していた。なんで避けなきゃいけないと思っていたんだろう。別にあいつらがあの戦争を起こしたわけじゃないのにな。確かキッドのメールアドレスならわかるはずだな。

（「ぼだいじゅ」 ordered by kyouko--san/text by TAKASHINA, Tsunehiro a.k.a.hiro）

感謝の言葉と、お願い&お誘い

Sudden Fiction Project（以下SFP）作品を読んでいただきありがとうございます。お楽しみいただけましたでしょうか？ もしも気に入っていただけたらぜひ「コメントする」のボタンをクリックして、コメントをお寄せください。ブログへの登録（無料）が必要になりますが、この機会にぜひ。

「気に入ったけどコメントを書くのは面倒だ」と言うそのあなた。それでは、ぜひ「ツイートする（Twitter）」「いいね！（Facebook）」あたりをご利用ください。あるいは、mixi、はてな等の外部連携で「気に入ったよ！」とアピールしていただくと大変ありがたいです。盛り上がります。

※星5つで、お気に入り度を示すこともできますようですが、面と向かって星をつけるのはひよっとしたら難しいかも知れませんね。すごく気に入ったら星5つつける、くらいの感じでご利用いただければ幸いです。

現在、連日作品を発表中です。2011年7月1日から2012年6月30日までの366日（2012年はうるう年）に対して、毎日「1日1篇のSFP作品がある」という状態をめざし、全作品を無料で大公開しています。→[公開中の作品一覧](#)

SFP作品は、元作品のクレジットをきちんと表記していただければ、転載や朗読などの上演、劇団の稽古場でのテキスト、舞台化や映像化などにも自由にご活用いただけます。詳しくは「[Sudden Fiction Project Guide](#)」というガイドブックにまとめておきました。使用時には、コメント欄で結構ですので一声おかけくださいね。

ちょっと楽屋話をすると、7月1日にこのプロジェクトを開始して以来、日を追うごとにつくづく思い知らされているのですが、これ、かなり大変なんです（笑）。毎日1篇、作品に手を入れてアップして、告知して、[Facebookページ](#)などに整理して……って、始める前に予想していたよりも遥かに手間がかかるんですね。みなさんからのコメント、ツイート（RT）、「いいね！」を励みにがんばっていますので、ぜひご協力お願いいたします。

読んでくださる方が増えるというのもとても嬉しい元気の素なので、気に入った作品を人に紹介して広めていただけるのも大歓迎です。上記Facebookページも、徐々に充実させてまいりますので、興味のある方はリンク先を訪れて、ページそのものに対して「いいね！」ボタンを押してご参加ください。

10月からは「1日1篇新作発表」の荒行（笑）を開始し、55作品ばかり書き上げる予定です。「[急募！お題 この秋Sudden Fiction Project開催します](#)」のコメント欄を使って、読者のみなさんからのお題を募集中です。自分の出したお題でおはなしがひとつ生まれるのって、ぼくも体験済みですが、かなり楽しいですよ！ はじめての方も、どうぞ気軽に遠慮なくご注文ください（お題は頂戴しても、お代は頂戴しないシステムでやっています。ご安心を）。

こんな調子で、2012年6月30日まで怒濤で突き進みます。他にはあんまりない、オンラインならではの風変わりな私設イベントです。ぜひ一緒に盛り上がってまいりましょう。

ワールドツアー

<http://p.booklog.jp/book/41901>

著者 : hirotakashina

著者プロフィール : <http://p.booklog.jp/users/hirotakashina/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/41901>

ブックログのpapier本棚へ入れる

<http://booklog.jp/puboo/book/41901>

公開中のSudden Fiction Project作品一覧

<http://p.booklog.jp/users/hirotakashina>

電子書籍プラットフォーム : ブックログのpapier (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社 : 株式会社paperboy&co.